

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2014.7 No.81

トピックス

江戸一目図屏風の実物公開
紅葉山東照宮の御簾の公開
「江戸日記」画像のネット公開

資料紹介

作事所作成の津山城御殿絵図ほか
東 万里子

研究ノート

津山城下町の義倉
尾島 治

お知らせ

秋の特別展のご案内



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(表紙写真 分間江戸大絵図と津山藩の江戸日記)

江戸一目図屏風の実物公開

4月4日～5月6日

多くの方に江戸一目図屏風の実物を見ていただこうと、今年も桜の時期からゴールデンウィークにかけての春の観光シーズンに合わせ、4月4日から5月6日の期間で実物を特別公開しました。

展示期間中は1300人を超える入館者があり、大勢の方が江戸一目図屏風を見学されました。



江戸一目図は
本当に見ごたえのある
屏風だね!



博物館キャラクター
「鶴若」

今年度は他の博物館などに貸出をする予定がありませんので、次回は11月6日から11月30日までの期間で実物を展示する予定です。この機会にぜひご来館になり、江戸一目図屏風の世界をお楽しみください。

紅葉山東照宮の御簾の公開

7月19日～8月31日

7月19日から8月31日まで紅葉山東照宮の御簾を展示します。紅葉山東照宮とは、元和4年(1618)に江戸城内の紅葉山北西に建立された東照宮です。その周辺には歴代將軍の靈廟も建立され、それぞれの命日に將軍が参詣していました。

その東照宮の神前に掛けられていたこの御簾は、全体として非常に豪華な作りです。細い竹ひごを編み、周囲は緞子(地が厚く文様をあしらった光沢のある絹織物)でふちどられ、三葉葵紋の金具や織模様が多数あり、最上部には、中央の日輪をはさんで左右に龍・麒麟・天馬・獅子の飾り金具が配置されています。

徳川家康を祀る社殿を飾っていた華やかな御簾を、ぜひご覧ください。



「江戸日記」の画像をネットで公開

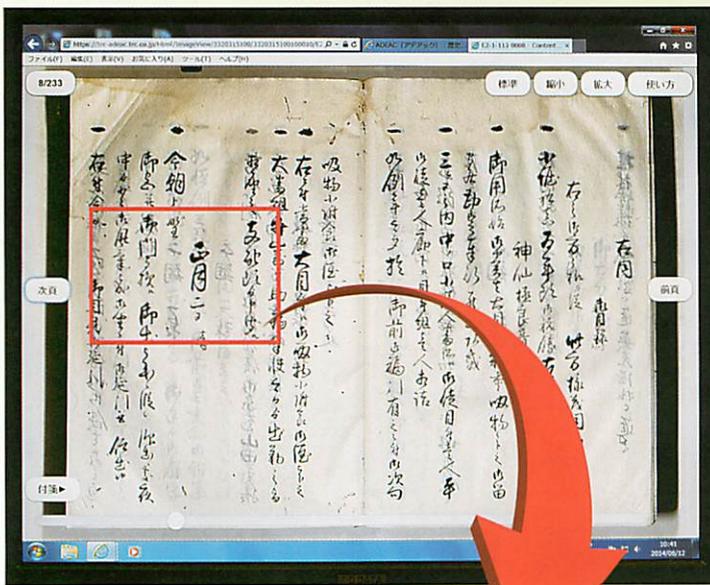
6月20日

6月20日から「江戸日記」375冊と「江戸屋敷絵図」等13点の画像を、インターネット上で公開しています。

岡山県指定重要文化財の津山藩松平家文書に含まれる「江戸日記」は、松平家が津山を拝領する以前の天和元年（1681）からはじまり、明治元年（1868）分まで残っています。おもに江戸藩邸での出来事を記した日記で、藩主とその家族や藩士の公的・私的な事項、幕府・他藩との交際状況など、さまざまな事柄がわかる貴重な史料です。あわせて公開する「江戸屋敷絵図」は、津山藩の江戸藩邸の絵図面で、江戸日記の内容を理解する上でも重要です。

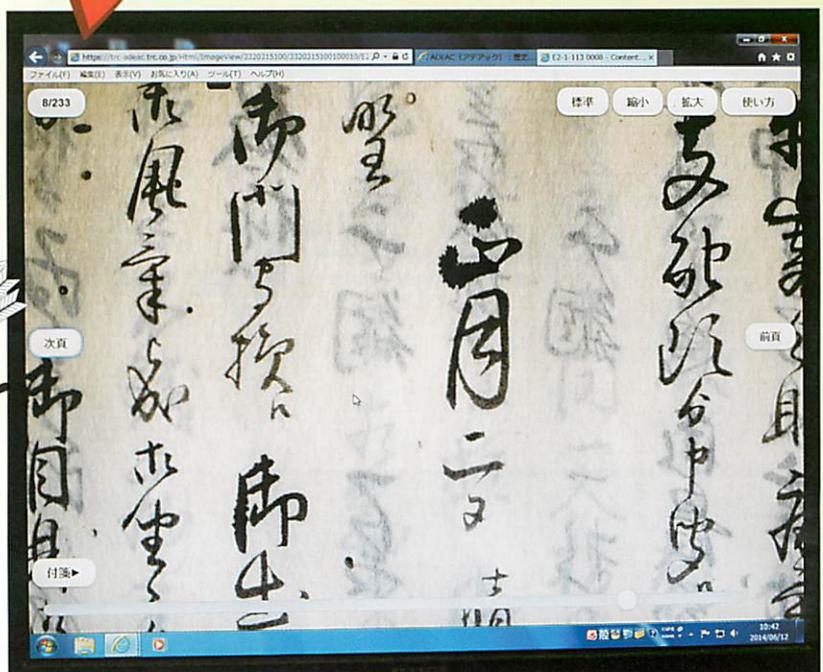
図書館振興財団の助成を受け、昨年度にこれらの史料をデジタル撮影しました。日記の紙の質感まで感じとれる最先端の高精細画像です。以前から「江戸日記」閲覧のために全国各地の研究者が来ていましたが、ネット上での画像公開によって、世界中どこからでも「江戸日記」の閲覧が可能になり、さらなる研究の進展が期待されます。

当館のホームページに、公開サイトへ案内するバナーを設けていますので、そちらからご覧ください。



江戸日記の公開画像

部分拡大も思いのままに、実物の閲覧以上に細部を確認できます。



世界中どこからでも見られるなんて便利だねえ!



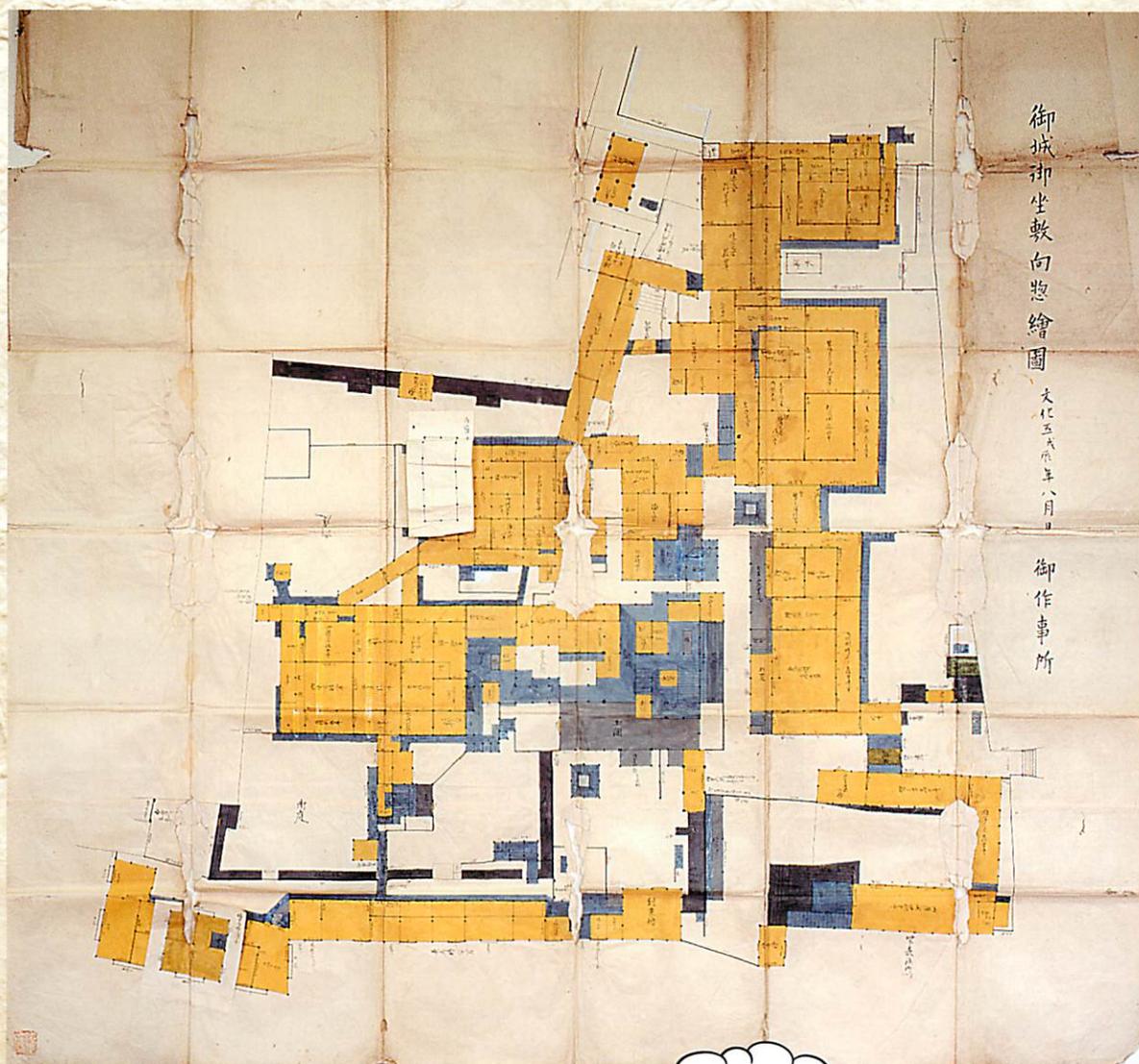
博物館キャラクター つきよしのわか「津郷之介」

作事所作成の津山城御殿絵図ほか

この絵図は、津山城本丸御殿の絵図です。『津山城資料編』で全体が、『津山城百聞録』『津山学ことはじめ』では部分的に紹介され、津山城に関するさまざまな研究に用いられてきました。文化5年(1808)8月という作成年代が記入され、細部まで丁寧に仕上げられており、文化6年の本丸火災以前の様子をよく伝えています。備中櫓の構造も、この絵図によって明らかとなった点が多々あります。「御作事所」と記入があることも、この絵図の信憑性を高めています。

作事所とは、その言葉どおり、城をはじめさまざまな場所の修繕などに従事する部署です。慶応3年(1867)の「御作事支配之者分限帳」には、作事所で仕事をしていた棟梁、左官、門番などの名前とともに各人の履歴が記入されています。作事所内部の様子がわかります。

※これらの資料は、最近ご寄贈いただいた池上知行家資料の一部です。



御城御座敷向惣絵図
文化五年八月日
御作事所

御城御座敷向惣絵図



御作事支配之者分限帳

御殿の間取りがよくわかるね。



博物館キャラクター「ファイアー」

東万里子

津山城下町の義倉

尾島 治

はじめに

明治の津山を代表する郷土史家

矢吹正則の『美作略史』巻之四に、

弘化3年(1846)6月、津山の城下町に義倉が設置されたという記録が収録されている。義倉の設置場所は京町であった。

江戸時代の備蓄施設としての義倉は、全国各地で設置されていた。

津山城下町では、『美作略史』にあるように、幕末にいたって、城下町の中心地である津山城の京橋門出口近くに置かれた。

この義倉は、備荒用の貯穀蔵という意味において、窮民救済を目的としたものであるが、そうした意味では、江戸時代においても様々な施策が実施されている。それら全てを現在の福祉と同様に考えることはできないが、予防・救済を目的とする、社会や郷蔵、義倉を用いた貯穀や囲米などが、不可欠であったことは間違いない。

直接的な救済であるお救い米の実施については、津山藩松平家の美作入封直後から見られ、例えば

正徳6年(1716)3月には、城下町で545人に対して一日一合を40日間支給している。

また、享保18年(1733)3月

には飢民に塩と麦を給している。こうした窮民救済に際しては、藩や有力町人などが食料の配給を行っているが、まだ、恒常的な備蓄施設には至っていないかった。

津山では、宝暦9年(1759)

6月、在方における郷倉の設置が、施設としての最初とされている。その後も町方難渋に際してのお救い米が支給されているが、そうした中で、寛政2年(1790)には、

町方での囲米が実施され、町人44人が囲米を命じられている。ただ、この時には、特定の施設ではなく、各自の家での保管が原則であった。

そして、天保の飢饉を経て、弘化2年(1845)には義倉設置の機運が盛り上がっていったのである。

ここでは、津山城下町において、義倉が設置された状況とその経過について確認しておきたい。また、この義倉の建物が現存している可

能性について触れておく。

義倉の設置

津山松平藩では、城下町における備荒用の囲穀は実施していたものの、当初は、義倉での備蓄米の保管ではなく、名目上の確保であった。

すなわち、津山松平藩後期に行われていた城下町の囲穀の取り扱いは、現物ではなく切手による確保であった。これは、毎年、市中囲穀を目的とした切手を作成して、役筋の小頭と大年寄配下の惣締が立会の上で箱に収め、御金蔵に預けられるという仕組みであった。こうしていつでも米と交換の出来る切手として保管して置き、必要な場合には現物の米を支出するのである。

この米切手の抛出者は有力な町人であり、彼らは囲穀献納によって褒美を下されたり、屋号と名前を一行に書き記すことのできる、屋号書下という名誉を手にするのである。

そして、保管されていた米切手は、毎年7月末で切手の書替を実施し、8月か9月頃に酒造稼ぎの者に貸し付けるのである。酒造稼ぎの者からは、新米の切手が返済に充てられ、再び御金蔵に保管される。

この場合、新穀の出来具合を勘案して、飢饉のおそれがないと判断される場合には、酒造稼ぎの者に割り付けられて、米が貸し付けられることになっていたのである。古米の蓄積を防ぐ方策であった。

寛政4年(1792)8月6日、城下町の造酒屋が大年寄の蔵合孫左衛門を通じて、「昨年囲米千俵御積替ニ而造酒屋共江拜借被仰付候間当年も拜借仕度何卒少も早く拜借仕度」として町奉行所に願出ている。これは、前年の例に倣って囲米千俵を酒造米として借り受けたいとの要望であり、米価の高騰で米が不足していることもあるが、造酒屋が囲米の積替をあてにしている様子が伺われる。

弘化2年(1845)7月28日にも、この市中囲穀の米切手を書き替えるため、担当者が町奉行役

所に出勤して作業を行った。

こうした中で、囲穀専用の倉庫として義倉の建築が計画されたのである。弘化2年9月23日の『町奉行日記』には、「囲切置場義倉建申度伺済」との記事が見られる。町奉行は、馬場五郎兵衛であった。

10月になると、義倉建設の場所や配置などの計画が進んでいる様子で、場所は「京橋御門出口東角」で、南向きの敷地に入口門を付ける計画が記録されている。これは、貯穀惣締からの提案として、京橋御門出口東側に大破した家屋敷が二軒あるので、これを購入して義倉を建てれば、火除の空間もあるし、場所柄が何かと便利ではないだろうかということ、京町の年寄二文字屋善兵衛に任せてはどうかという話が元になっていた。

こうして義倉建設の準備は進み、翌弘化3年(1846)正月には、土蔵と門に「義倉」の額を掲げることとなり、その旨が大年寄に伝えられた。

18日になると、瀬島左平が用意した土蔵基礎の石工入札用の仕様書ができあがり、いよいよ入札を執り行うこととなった。

こうして義倉設置に向けた動き

は着実に進んでいたが、その一方で、これまでのシステムから新システムに移行するための囲穀の準備も行われている。正月20日には「貯穀買入惣引受」として久山源五右衛門が定められ、「貯穀買入方」として東新町の鋼屋善五郎が配置された。

ただ実際は、市中囲穀として年末から春にかけて納める筈であった米(切手)については、米価が高騰していたため買入れが進まず、十五貫目の銀札がそのまま保管されていた。また、3月には新しく買入れた米(切手)を納めることが必要であったが、買入れをひかえることとなった。

既に見たように、囲穀の充実は献納が基本で、この時点では前年12月に、一石に付八十匁が納められていた。その経費で5月中に全て米切手に買い換えておく必要があつたが、米価高騰で思うように買い換えができなかつたのである。この頃の米相場では騰貴が続いており、蔵米相場は、高いときには百十匁に達していた。これに対して町奉行は、6月中には米価に拘わらず上納するように命じている。

閏5月9日の記事によれば、翌

10日が義倉の棟上と決まり、町奉行は大目付に報告している。これは必ずしも報告の義務はなかつたようであるが、藩主が在国の年であつたため、京橋門に近い場所での騒ぎを配慮してのことであつた。棟上には、担当の大年寄斎藤孫右衛門と諸吟味玉置淳助が麻上下で出役した。

そして、10日には予定通り義倉の棟上が執行された。棟上は、藩の大工棟梁瀬島左平が差図をして行われたが、棟上の噂が広まつたため、見物人が一人近く集まり、伏見町から京町筋にかけて人で埋まつたらしい。この時には餅米十三俵が提供されていたので、賑やかな餅撒きとなつたと思われる。

閏5月20日には、貯穀買入惣引受に茂渡義右衛門、貯穀買入方に西今町の丸屋林兵衛が申しつけられた。

閏5月21日には、「義倉出来」とあり、これまで米切手で保管されてきた八百俵の米が藩の蔵から引き出され、義倉に収納されたことが報告されている。義倉としての本格的な稼働が開始されたと見てよいだろう。

その後6月には、関連して協力

した多くの有力町人が褒美を下されている。そして、8月になると以前からの例により、米の詰め替えに伴う酒造屋への貸付が決定されている。返納は半分が10月、残りの半分が11月という約定であった。

義倉のその後

明治になって義倉は廃止されたが、建物は、廃棄されることなく、その後しばらく利用された。『津山市史』第六巻によれば、明治15年(1882)に「津山共同勸工場」が設立されており、そのための施設として旧義倉が修理され利用されたということである。この勸工場は一年ほどで閉鎖されたらしいが、この時も、建物は取り壊されることなく残された。

その後の経過を知る手がかりが、大正15年(1926)5月刊行の『津山商工案内』に記録されている。その記事によれば、京町の義倉は明治7年(1874)に廃止され、一時その建物が米穀取引所などに利用された後、位置を替えて山陽銀行本店の倉庫として利用されている旨が記録されている。義倉が

一時的に米穀取引所として利用されたことが分かるが、残念ながら、勸工場との先後関係ははっきりしない。

ここでいう「位置を替えて」というのは、門構えのあった江戸時代の状況から考えて、敷地の中央付近にあった蔵を、敷地の北奥に移動したことを指していると考えられる。

山陽銀行は、作備銀行と津山銀行が合併して設立された銀行で、大正13年(1924)、その本店を



大正15年刊行の『津山商工案内』に掲載されている山陽銀行本店の写真。左側奥に蔵が見えている。大正15年頃。

し、今となつてはこの時の詳細を知ることは出来ない。その移転先も明確ではない。

ただ、山陽銀行のその後の経過から、昭和4年の義倉建物移転について、推測することが出来る。

津山町大字京町に置いた。そして、この頃の様子と思われる写真には、本店の北側背後に蔵が写っている。

昭和11年(1936)4月刊行の『津山史蹟』では、京町大手口東角に義倉があつたことが記されている。そして、縦四間横九間二階建ての建物が、昭和4年(1929)に市内北町に移築されて、現在(昭和11年)も「原形其儘」に残っているとす。また、屋根の鬼瓦には「義」の字が記されていたと



増改築前の山陽銀行本店の写真。昭和初年頃(江見写真館提供)

和5年の間で異なることは間違いない。

昭和5年の合併まで、山陽銀行の経営は順調であり、昭和4年頃に本店の増改築をしたとしても不思議ではない。そう推測すれば、昭和4年の義倉の移転という

昭和5年(1930)、山陽銀行と第一合同銀行が合併して中国銀行が誕生した。そして、山陽銀行本店は、中国銀行津山支店となった。昭和5年の中国銀行合併以前と思われる、山陽銀行最末期の写真では、白壁となつた本店の建物が北側背後に拡大する形で増築されており、蔵が無くなつてい。この増築の時期を確定することは出来ないが、少なくとも大正15年の『津山商工案内』に黒壁の本店写真が掲載されていることから、大正15年から昭和



増改築後の山陽銀行本店。左側奥に増築されて蔵がなくなっている。昭和初年～昭和5年(江見写真館提供)

現在、北町に移転したとされる義倉の行方は確実ではない。しかし、北町付近に類似した大型の蔵が現存しており、少なくとも昭和初期までは遡る事の出来る、津山城から移転した蔵であるという伝承を持つ。伝承に食い違いがあるものの、四間九間の二階建てという構造が酷似しており、義倉である可能性を否定できない。もし江戸時代の義倉が残されていれば貴重な文化財である。今後の調査に期待したい。

秋の特別展のご案内

今年度の特別展は「津山の商家が伝えた文人画～^{ひろせ たいざん}広瀬台山と^{いいつかちくさい}飯塚竹斎 ^{かんだ}菟田家コレクションよ
り」というテーマで、下記のとおり開催いたします。

会期 平成26年10月4日(土)～11月3日(月)祝

休館日 10月6日(月)・10月14日(火)・10月15日(水)・10月20日(月)・10月27日(月)

会場 当館 3階 展示室

菟田家は江戸時代から続く商家で、その邸宅は宝暦年間に建てられたと言われています。このたび菟田家からその邸宅を津山市に寄付されることになり、それに合わせ菟田家で所蔵していた古文書や書画類の多くが寄贈されることになりました。この書画類の中には、津山を代表する文人画家広瀬台山や飯塚竹斎の作品も数多く含まれています。

この展覧会では、菟田家の書画類の中から広瀬台山と飯塚竹斎の文人画にスポットを当て、津山の商家が守り伝えてきた絵画コレクションの一部を紹介します。どうぞご期待ください。



貴重な絵画を
たくさん見られるのが
楽しみだなあ

博物館キャラクター
「パレ夫」



飯塚竹斎・雪中山水図



広瀬台山・遺琴贈帰図



博物館だより「つはく」
No.81 平成26年7月1日

津博
TSUJIBOKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月27日～1月4日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。